

## パサリ氏のこと（二）

愛甲次郎

文語原稿（平成二十七年二月）

ヴァーラーナシーはガンジス河中流に位置し、インド最大の聖地なり。英國統治時代以來ベナレスの名にて世界に知らる。市内に存する著名なるヒンドゥー寺院もさることながらガンジス河畔のガート（階段状の沐浴施設）こそベナレスの象徴なれ。ヒンドゥー教徒はガンジス河に強き治療効果あることを固く信じ、その水に全身を浸すためにこのガートに集ふ。ガンジスはこの邊りにては文字通りの大河となり緩く流るるも、上流より流され來たるものには流木、家畜の死骸などもあり、水は赤く濁る。老若男女の信者は水質の見た目に穢れたるは全く意に介せず、ただひたすら聖なる水にて心身を清む。

ガートの上の廣場には多くの火葬場ありて、積み上げた薪の上に死體の焼くを見る。古よりベナレスに死すれば天に生まるとの信仰ありて、死期を迎へたるインド人のベナレスのホテルにて最期を待つ者多しと言ふ。さればガートの火葬場の空くことなし。

パサリ氏、ベナレス到着の夕刻、余をガンジスのボートライドに誘ふ。

ホテルより埃の舞ふ路を河へ向ふ。波止場には二階建ての風通し良き木造船繋留せられたり。既に観光客三々五々乗船を始め、席を取りつつあり。我等二階デッキの上に並べられたる折り疊み椅子に陣取る。船の上より見ればガートは早や黄昏れ、街の建物のシルエットは茜色の空に黒く浮かび上がれり。ガートの上の騒音に加へ、乗客の話し聲周圍に満ち、空を渡る鳥の聾し。やがて舟は岸を離れ、見る見る中流へと出でぬ。岸の上は既に暗くなりて、ただ屍を焼く火のみ明し。氣づけば船客話す者なく、静寂邊りを覆ふ。自づと瞑想状態に入りぬ。ベナレスの聖なる氣に包まれたる効果と言ふべきか。時間の觀念を失ひて船着場に戻る。岸の上は再びかの喧騒余を迎ふ。歸路パサリ氏一坐のヒンドゥー寺院を案内す。寺院に至る參道に店立ち並び觀光客を招く。その内の一つにガンジスの水を鬻ぐものあり。掌に入るほどの銅の壺にガンジスの水を封じ込めたるものなり。余家内の豫てより指輪の寶石を淨むるためにガンジスの水を求め居たるを憶ひ出し、これを購ふ。

ホテルに歸りて夕飯を認めぬ。食事を終へてパサリ氏は織物の取引、商賣の世界に歸り行きぬ。余は獨り部屋に戻りてガンジスの體驗を反芻す。